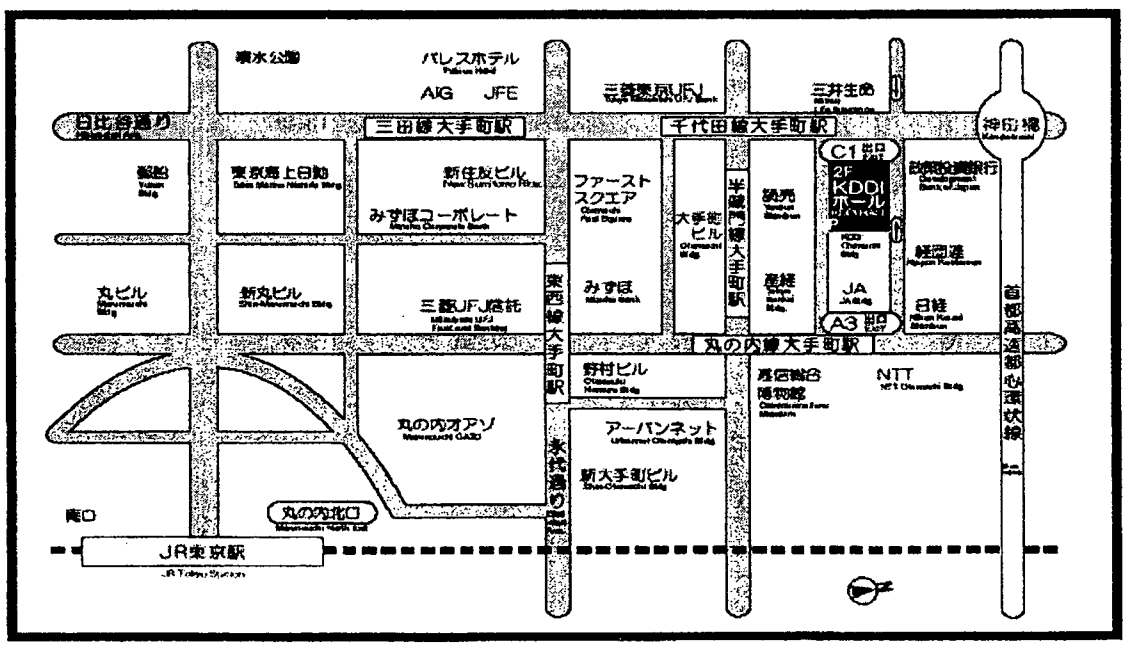
政策科学推進研究事業公開シンポジウム 参加申込書ＦＡＸ送信用　ＦＡＸ　03-3473-8300

住　所	〒　　— TEL　　—　　—		
フリガナ 氏　名		勤務先 職　　業	
住　所	〒　　— TEL　　—　　—		
フリガナ 氏　名		勤務先 職　　業	
住　所	〒　　— TEL　　—　　—		
フリガナ 氏　名		勤務先 職　　業	

ＫＤＤＩホール案内図



●地下鉄千代田線・半蔵門線・東西線・三田線 大手町駅 C1 出口直結

●地下鉄丸の内線大手町駅 A3 出口徒歩 1 分

平成21年度厚生労働科学研究　政策科学推進研究事業公開シンポジウム

入場無料

子どもが健やかに育つ社会

| 日時 | 平成22年

2/24㈬

13:30〜17:00

| 会場 |

KDDIホール

東京都千代田区大手町1-8-1 KDDI大手町ビル2F
(地下鉄「大手町駅」C1又はA3出口)

| 開会挨拶 | 13:30

社会福祉法人恩賜財団母子愛育会理事長●古川 貞二郎

厚生労働省大臣官房政策評価審議官●生田 正之

| 研究成果発表 | 13:40〜15:50

「少子化社会における保育環境のあり方に関する総合的研究」

白梅学園大学子ども学部子ども学科教授●民秋　言

「次世代育成支援政策における産後育児支援体制のありかた」

国立保健医療科学院公衆衛生看護部ケアシステム開発室長●福島 富士子

「子ども虐待問題と被虐待児童の自立過程における
複合的困難の構造と社会的支援のあり方に関する実証的研究」

札幌学院大学人文学部教授●松本 伊智朗

「地域の子育て支援としての一時保育事業の学習機能に関する研究
—ファミリー・サポート・センター事業に着目して—」

佐賀女子短期大学講師●東内 瑠里子

| 総合討論 | 16:00〜17:00

〈座長〉立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授●庄司 洋子

（課題名）地域の子育て支援としての一時保育事業の学習機能に関する研究
ーファミリー・サポート・センター事業に着目してー

研究代表者：東内瑠里子

■　研究目的・方法・結果概要

◦　研究目的

本研究は、ファミリー・サポート・センター事業初設置15年を経過したいま、本事業が、親の育児放棄を促すのではなく、「親を育てる」意味での「子育て支援」として役割を果たしているのか、また果たしているとすれば、どのような要素が、子育て支援としての機能を成立させているのか検証した。つまり、「託児以外の『学習機能』が本事業にある」という仮説を立て、検証し、今後の子育て支援政策の展望を明らかにする。

◦　方法

＜親・保育者調査＞全国の本事業利用者（親および保育者）に対して質問紙調査を実施。有効回収票は、親962票（回収率39.2%）、保育者1,142票（回収率46.61%）であった。

＜アドバイザー調査＞先進地ヒアリング調査および全国質問紙調査（3月末に終了）を実施した。

＜海外比較＞イギリスにおける住民相互の支え合いであるホームスタートを現地調査した。

◦　結果概要

本事業には、託児以外の『学習機能』がある（表1）。それを成立させる要素は二つある。一つに、親と地域住民である保育者との間で、子どもとの関わり方、家事や育児の方法、地域とのつながりを経験できる学習機会が存在すること。二つ目に体制的要素として、行政の隙間を埋める形でかなり柔軟な活動が展開されているためである。逆に、行政の隙間を埋める柔軟さがなくなれば、学習機能は成立しない可能性があると言える。

■政策への反映方法の提言

アドバイザーの専門性と雇用（表2）、研修の在り方、低所得者層への支援、柔軟な制度設計の在り方など検討が必要である。

■表1「親の経験」と「親の発達」の相関（***P＜.001のみ）

経験＼発達	柔軟性	自己抑制	受容の	運命・信仰・伝統	広がりの視野	存在感・生き甲斐	自己の強さ
子どもとの関わり方	○	○	○			◎	○
家事や育児の方法			○		○		
地域とのつながり	△		△		◎	○	
地域づきあいの煩わしさ							

◎値が.025以上　○値が.02以上　△数値が.015以上

■表2　アドバイザーの雇用形態

市名	運営方法	職員数	雇用形態	更新	労働時間		給与	有給休暇	保険適用	交通費	時間外対応
					1日	1週					
A市	直営	2	嘱託	1年	7	15日/月 12日/月	月給	6日 無	雇用保険	無	携帯対応 7時～22時
B市	委託	2	嘱託	なし	8	32時間	月給	無	雇用保険 社会保険	無	
C市	直営	4	嘱託	1年	7.5	30時間 23時間	月給	15日 11日	雇用保険 社会保険	無 （勤務時間内有り）	携帯対応8時30分～22時、日・祝日は転送
D市	直営	2	嘱託	1年	6	30時間	月給	10日	雇用保険 社会保険	無	携帯対応7時～22時、土日・祝祭日は転送
E市	委託	4	パート	1年	6	24時間	月給	無	雇用保険	無	

※沖縄県ファミリー・サポート・センター連絡協議会「ファミ・サポのあゆみⅡ－実践事例集－」平成21年、p45から引用し、市町村名を伏せた表を筆者が作成。

地域の子育て支援としての一時保育事業の学習機能に関する研究
－ファミリー・サポート・センター事業に着目して－

研究代表者：東内　瑠里子　佐賀女子短期大学

1．研究目的

本研究は、ファミリー・サポート・センター事業（以下、本事業と称す）初設置15年を経過したいま、本事業が、親の育児放棄を促しているのではなく、「親を育てる」意味での「子育て支援」として役割を果たしているのか、また果たしているとすれば、どのような要素が、子育て支援としての機能を成立させるのかについて検証した。つまり、「託児以外の『学習機能』がファミリー・サポート・センター事業にある」という仮説を立て、検証し、今後の子育て支援政策の展望を明らかにする。

本研究によって、厚生労働省が福祉行政として行っている本事業を、教育学の視点から捉えなおし、「現代の親は、子育て支援を消費サービスとしか捉えられない」という壁を乗り越え、地域住民によって相互に支え、地域に根づいた日本独自の親の主体形成の可能性を展望する。

2．研究方法

＜親調査＞＜保育者調査＞全国の本事業において親および保育者に対して質問紙調査を実施した。調査対象は、厚生労働省雇用均等・児童家庭局「次世代育成対策交付金」（2007年）の交付を受け活動している540箇所の親・保育者各2,450名が母集団である。有効回収票は、親962票（回収率39.2％）、保育者1,142票（回収率46.61％）であった。調査票は、政令指定都市とそれ以外の地域でデータを区別した。

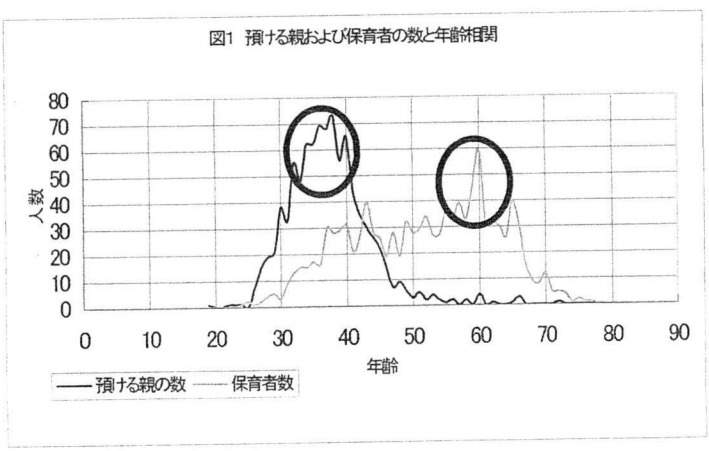
＜アドバイザー調査＞先進地ヒアリング調査および全国質問紙調査（3月末に終了）を実施した。

＜海外比較＞イギリスにおける住民相互の支え合いであるホームスタートを現地調査した。

3．研究結果及び考察

＜親調査＞

親と保育者の年齢構成は、図1の通りである。本事業における親の経験について「地域の人がいろいろな関わりをしてくれる」「子どもを預かることだけが支援内容ではない」など、これまで概括的記述に止まっていた内実を明らかにし、第Ⅰ因子＜子どもとの関わり方を学ぶ経験＞、第Ⅱ因子＜家事や育児の方法を学ぶ経験＞、第Ⅲ因子＜地域とのつながりを学ぶ経験＞、第Ⅳ因子＜地域づきあいの煩わしさを知る経験＞と命名した。本事業は、子どもを預ける、預かるという行為だけでなく、親にとって、大きく4つの経験をする機会となっているといえる。次元得点平均は、第Ⅲ因子＜地域とのつながりを学ぶ経験＞については、3.18であり、他の因子と比較して高い。また、第Ⅳ因子＜地域づきあいの煩わしさを知る経験＞は、1.20と最も低い。そして経験因子と、柏木・若松（1995）による親の発達因子「柔軟性」「自己抑制」「運命・信



経験＼発達	柔軟性	自己抑制	運命・信仰・伝統の受容	視野の広がり	生き甲斐・存在感	自己の強さ
子どもとの関わり方	○	○	○		◎	○
家事や育児の方法			○	○		
地域とのつながり	△		△	◎	○	
地域づきあいの煩わしさ						

◎値が.025 以上　○値が.02 以上　△数値が.015 以上

仰・伝統の受容」「生き甲斐・存在感」「自己の強さ」の関係について明らかにした。＜子どもとの関わり方を学ぶ経験＞、＜家事や育児の方法を学ぶ経験＞、＜地域とのつながりを学ぶ経験＞に値は大きくないが有意差がみられた(表1)。

表1「親の経験」と「親の発達」の相関(***P＜.001のみ)

＜保育者調査＞保育者が、親との関わりで気をつけている点は、「①対話や情報交換を大切にする。(505)」「②価値観を押しつけず、信頼関係を大切に、受容・共感したり、励ましたりする。(436)」、「③相談に応じ、経験やアドバイスを話す。(173)」、「⑥プライバシーにむやみに立ち入らない。仕事として線引き。(82)」である。課題は、個人情報の問題、ボランティアの責任論、またさまざまな地域住民との関係などがあった。

表 2. 運営方法

運営方法	市町村数
直営	326
委託	310
その他	13
全体	649

＜アドバイザー調査＞アドバイザーの①専門性、②雇用実態、③課題を明らかにするために①本事業のモデルとなった団体(茨城県日立市)、②全国で最も早く設置した4団体の一つ(山口県山口市)、③直営によって運営している団体(大阪府貝塚市)、④委託先として多いNPO法人に設置された団体(福岡県飯塚市)、⑤先進的な活動を行っている団体(沖縄県ファミリー・サポート連絡協議会)にヒアリングを行った。結果は、コーディネーターが先進的に動こうとすればするほど、「支援の充実や達成感、やりがい、生きがい」と「低賃金・時間外労働は自己責任」「責任は重いが身分は軽い」という矛盾を抱えてしまうことや、委託される民間団体の規模や財政的問題によって活動に格差が生まれることが明らかとなった。委託先の種別で活動の広がりが決まるのではなく、アドバイザーと行政職員の意識の問題、他機関との連携で活動に違いがあることがわかった。(全国調査の分析は現在進めている。)

＜海外比較＞日本と比べアドバイザーの高い身分保障(公務員より低いが)があり、子育て支援センター等既存の支援施設に来ることができない層の親と地域の人々をつなぐ役割を担っている。ただ、地域の財政格差で運営が困難になる団体もあった。

表3. 委託先

No	委託先	市町村数
1	社会福祉協議会	174
2	NPO	84
3	社会福祉法人等(保育所子育て支援センター)	25
4	財団法人福祉サービス公社等	9
5	財団法人 福祉ネットワーク	5
6	男女共同参画支援団体等(女性アカデミー等)	5
7	社団法人 シルバー人材センター	3
8	病院関係	3
9	株式会社	2
10	保育協会関係	2
	その他	10

＜その他＞企業組合、母子寡婦福祉会、社会福祉施設事業団、社団法人 ライフ・ケア・ひたち、社団法人児童館学童連盟、生活協同組合、婦人共励会、こどもサポートクラブ、保健福祉サービス公社、民間児童福祉施設協議会

※女性労働協会資料より筆者が作成

4. 結論

本事業は、親の育児放棄を促しているのではなく、「親を育てる」意味での「子育て支援」として役割を果たしていた。つまり、本事業には、託児以外の『学習機能』がある。それを成立させる要素は二つある。一つに、親調査や保育者調査から分かるように、親と

地域住民である保育者との間で、子どもとの関わり方、家事や育児の方法、地域とのつながりを経験できる学習機会が存在するためである。二つ目に体制的要素として、アドバイザー調査からわかるように、行政の隙間を埋める形でかなり柔軟な活動が展開されているためである。本事業は、柔軟な対応を行えば、地域住民によって相互に支え、地域に根づいた日本独自の親の主体形成を促す活動であると言える。ただし行政の隙間を埋める柔軟さがなくなれば、学習機能は成立しない可能性があると言える。

５．政策への反映

①低所得者層支援の実態についてさらに検証をすすめる（2009年8月18日雇児発0818第２号）

②できるだけ各地域の独自性が出せるような制度設計にする（分権型福祉、地域主権、コミュニティ保育）。行政と同じ制限のある活動をしていると「託児」機能しか発揮できない。そのためにアドバイザーを現在の不安定雇用ではなく、高い専門性を身につけた安定雇用とする。現在、ファミリーソーシャルワーカー（家庭支援専門相談員）は養護施設への配置が主であるが、本事業の運営力量（特に地域の人々を結び付ける力量）を身に付けた有資格者の配置を検討する。（與座初美「沖縄県こども白書」参考）（イギリスのホームスタート職員、カナダのファミリーリソースセンター職員等々を参考）

③アドバイザー研修は、都市部中心型ではなく、ブロックごとの情報交換の場を設置する。

④本事業および家族支援について行政職員の理解を促進する。

⑤本事業は、既存の保育制度解体の受け皿にはならない。（集団保育との相違点）

６．研究発表

①論文発表

・単著(2009)「地域の住民による一時保育と親の学習－ファミリー・サポート・センター事業の全国調査を通して－」日本社会教育学会,No.45,pp.21-30.

・単著(2010)「地域の子育て支援におけるコーディネーターの専門性と課題―ファミリー・サポート・センター事業に着目して―」佐賀女子短期大学研究紀要,3月発行予定。

②学会発表

・単独(2008)「地域の子育て支援としての一時保育事業の学習機能に関する研究－ファミリー・サポート・センター事業に着目して－」日本社会教育学会第55回大会,和歌山大学.

・単独(2008)「地域の子育て支援としての一時保育事業の学習機能に関する研究(2)―ファミリー・サポート・センター事業における保育者側の現状と課題―」九州教育学会第60回大会要旨集,熊本大学.

・単独(2009)「地域の子育て支援としての一時保育事業の学習機能に関する研究(3)―ファミリー・サポート・センター事業におけるコーディネーターの現状と課題―」日本社会教育学会第56回大会,大東文化大学.

地域の子育て支援としての一時保育事業の学習機能に関する研究

ーファミリー・サポート・センター事業に着目してー

東内　瑠里子
（佐賀女子短期大学）

研究の関心　ーファミサポについて考える前に

（公共的）福祉サービス事業の拡大

と

生活する当事者の主体性

との関係は？

財政破綻と公共事業の限界性、生活の主体性をそぐ公共事業と生活をよりよくする公共事業、本当に必要な公共事業とは、その仕組みとは何か？

研究の関心 ―ファミサポについて考える前に

子育て支援事業の成功とは何か？

自明であること・・・虐待予防、育児ストレスとレスパイト効果 （ストレスゼロが良いかどうか・存在するかどうか）、女性が働きやすい体制を整えること（女性が子育てしながら労働できる市場が確保されているかどうか、子どもにとってどうか）など。抽象的には「多様な子どもや親、家族の幸せ・権利」「次世代育成・地域づくり」

政策的成功とは？（例えば数値で表しやすいもの）・・・
・出生率が上がれば成功か？サービス利用者数が増えれば成功か？女性労働者数が増加すれば成功か？利用者満足度が上がれば成功か（満足度とは）？いつでもどこでも利用したいだけ利用できれば成功か？子どもにとってはどうなのか？

子育てをめぐる論　点 ―ファミサポについて考える前に

- 現代社会の生活における合理化と効率化の浸透は、生活環境と生活様式に人を介さなくとも生きていくことを可能にしつつある（例：無縁社会）。現代の人々（親も）は、手間暇のかかることや地域の人々と一緒につくっていく生活の豊かさよりも、子育ての外部委託化に流れやすく、子育て文化の衰退や育児力の衰退・低下を益々助長しかねない。

支援事業の量的拡大、メニュー化だけでなく、いま大切なのは質（影響）を検証すること

子育て支援事業をめぐる論点

—ファミサポについて考える前に

- 子育て支援事業は親の主体性をそいでいるのか

＜その他に＞

- 日本の乳児の約8割は、家庭の親のみに育てられている。支援が必要な場合、近隣の人々が関わるよりも、保健師や民生委員・児童委員、子育て支援センター職員、医師、カウンセラーなどの専門家のみが関わる体制・・・継続的関わり困難
- 近隣の人々に助けを求められない親がどのようにして助けを求められるようになるのか（自主的に子育てサークルやサロン、保育仲間をつくる力がある人ばかりではない）
- 助けたいのに声をかけてよいかわからない近隣の人々の存在

（子育て支援に寄与する地域の仕組みにテコ入れ）

子育て支援政策の成功の姿とは

—ファミサポについて考える前に

ひとつ言えることは・・・

- 単なる子育ての外部委託化を進めるのではなく、親の主体性を育む機能をもっているかどうか

学　習　機　能

さまざまな支援事業がある中で、

研究対象として ファミリー・サポートセンター事業を選定

- 支援者がいなかったり、親の財政面の問題があったり、さまざまな問題がある場合を除けば、親が望めば、望む回数のサービスを受けられる。実際、極端なケースがあるのか？子育ての外部委託化が進行するのか？親の主体性をそぐのか？

＜その他に＞

- 専門家ではない近隣の人々が支援する仕組み
- 無償ボランティアの限界性を乗り越える有償ボランティアの可能性と課題

ファミリー・サポート・センター事業とは

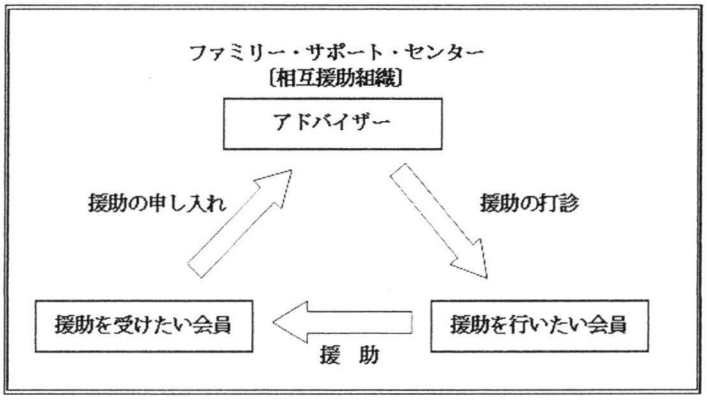
乳幼児や小学生等の児童を有する子育て中の労働者や主婦等を会員として、児童の預かり等の援助を受けることを希望する者と当該援助を行うことを希望する者との相互援助活動に関する連絡、調整を行う。（有償ボランティア）

■相互援助活動の例■

・急な残業の場合に子どもを預かる。
・保育施設までの送迎を行う。
・保育施設の開始前や終了後又は学校の放課後、子どもを預かる。
・保護者の病気や急用等の場合に子どもを預かる。
・冠婚葬祭や他の子どもの学校行事の際、子どもを預かる。
・買い物等外出の際、子どもを預かる。

厚労省HPより引用

事業のしくみ



厚生労働省HPより引用

運営方法

運営方法	%
直　営	50
委　託	48

委託先	%
社会福祉協議会	54
NPO法人	26

あるケース（親）との出会い①

—ファミサポについて考える前に

利用している時は、提供会員の気持ちが全く分からなかった。「子どもを預かってもらうために、こっちは、お金を出しているでしょう、だからそっちも黙ってやってよ」という状態。提供会員と利用会員の交流会の時、アドバイザーが、利用者の気持ちを、何でもみんなに教えてやって、と言ってくださった。わたしは、提供会員に「子どもを預けたときに、コンビニ弁当を食べさせていたとか、お尻にかぶれができているからちゃんとした方が良いとか、いろいろ言われると、ストレスがたまるので、言わないでほしいです。ただ、預かってもらえたらいいです。」と伝えた。【2006.8.30筆者のインタビュー】

あるケース（親）との出会い①

—ファミサポについて考える前に

子どもから離れたくて、少しでも離れることができる機会がある、ということで本事業の託児付き講座を受けることにした。家に子どもとこもっているときは、自分だけが悲劇のヒローインだった。外に出て初めてみんないろんな気持ちを持っていることを知った。自分と同じで、言葉に表せない「なんとなくブルーでイライラする」気持ちの人がいてびっくりした。「子どもから離れたい」という個人的な感情だけで託児付き講座を受けたのに、心のイライラが少し取り除けた。【2006.8.30筆者のインタビュー】

あるケース（親）との出会い①

ーファミサポについて考える前に

落ち着いて考えることができるようになって、周りを見る心のゆとりが出てきたら、周りにお世話になっていたことに気づいて、私も提供会員やってみようかな、と考えるようになった。提供会員をしてみたら、利用者側のわがままも見えてきて、自分の態度をすごく考えなおした。【2006.8.30筆者のインタビュー】

支援事業が親を変えていく事例

あるケース（支援者）との出会い②

ーファミサポについて考える前に

・ファミリー・サポート・センター事業という名称のため、家族丸ごと支援してくれると勘違いして、さまざまな電話がかかってくるが、対応している（PTAや授業参観について、お孫さんの些細な心配事）
・時間外も自分の携帯電話で対応し、できるだけ支援者につなぐことができるように努力している
・子育てサロンやサークルでは見えない多様な課題を持つ家庭の姿がよく見える
・保育所にも幼稚園にも行っていないが、適切な養育がなされているかどうか疑問→専門機関と連携

事業の枠組みを超える努力
→切り捨てるべきもの・・・なのか？

旧・労働省の政策で、雇用保険対象者への事業として始まった本事業は、ただの送迎や託児だけの機能を持っているのではないのかもしれない

＜仮説＞

ファミリー・サポート・センター事業には、送迎や託児以外の親にとっての学習機能があるのではないか？

研　究　方　法

＜親調査＞

全国の本事業利用者（親）に対して質問紙調査を実施。有効回収票は、親962票（回収率39.2%）。

＜保育者調査＞

全国の本事業利用者（保育者）に対して質問紙調査を実施。有効回収票は、保育者1,142票（回収率46.61%）。

＜アドバイザー調査＞

先進地ヒアリング調査および全国質問紙調査（継続中）を実施。

＜海外調査＞

イギリスにおける住民相互の支え合いであるホームスタートを現地調査した。

親　調　査

親の主体性を育む機能＝学習機能をどのように説明するか

本事業での「経験」と、「親の育ち（発達）」に関係があるかどうか

✓本事業での「経験」とは

✓「親の育ち（発達）」とは

二つの項目をつくり、相関を見る

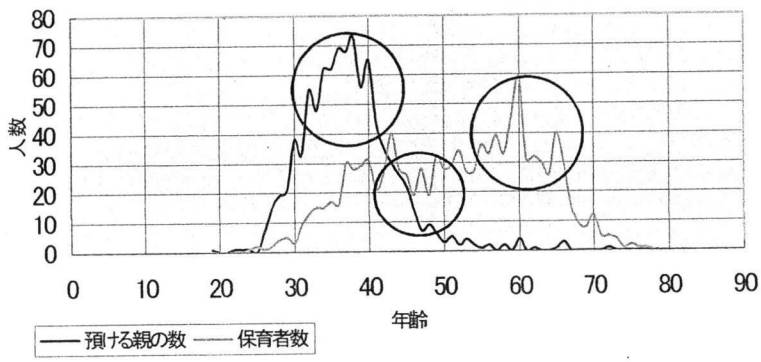
親　調　査

親に対する調査は、本研究の目的に沿って、次の3部からなる。
1.「親の発達」に関するもの（以下、親の発達と略す）
2. 本事業における「親の経験」に関するもの（以下、親の経験と略す）
3. 親の属性に関するもの（以下、親の属性と略す）
これに加えて、本事業に対する自由記述を加えた。「1. 親の発達」に関する項目は、柏木・若松論文を引用し、49項目を確定した。この質問に対して、「以前からそうだった（5の場合）」「そうなった（4の場合）」「まあまあそうなった（3の場合）」「あまりそうなったとは思わない（2の場合）」「全くない（1の場合）」の5段階選択肢を設定し、最も該当するものの選択を求めた。「2. 親の経験」に関する項目は、今回の調査で開発した。筆者が、昨年佐賀県鳥栖市をフィールドとして、聞き取り調査を行った。それを元に、親の経験項目を予測し、2007年12月～1月中旬にかけて、佐賀県鳥栖市および唐津市676名を対象にして予備調査を行い、153通を回収（回収率22.6%）し、項目を開発、32項目を選定した。さらにここで作成した調査紙によって、佐賀県佐賀市、小城市にご協力いただき、再度予備調査を実施し、親の経験項目の確定に至った。この質問に対して、「よくある（4の場合）」「全くない（1の場合）」を両極とする4段階選択肢を設定し、最も該当するものの選択を求めた。
「3. 親の属性」に関する項目は、本人の年齢、子どもの人数、就労の有無、職種、事業の利用頻度、利用している援助内容など18項目を選定した。

親　調　査

会員の構成（保育者調査含む）

図1　預ける親および保育者の数と年齢相関



親　調　査

保育の内容（複数回答）

①	自宅から保育所等への送迎。	50.8%
②	保育所・幼稚園の開始前や終了後子どもを預かる。	43.8%
③	学校の放課後や学童保育終了後子どもを預かる。	36.3%
④	学校の夏休みなどに子どもを預かる。	15.0%
⑤	保護者等の病気や急用等の場合に子どもを預かる。	46.4%
⑥	冠婚葬祭や他の子どもの学校行事の際、子どもを預かる	26.0%
⑦	買い物等外出の際、子どもを預かる。	25.9%
⑧	その他	29.0%

親　調　査

「親の経験」次元得点平均（標準偏差）

	利用者	P
第1因子：子どもとの関わり方を学ぶ経験	2.28（0.75）	***
第2因子：家事や育児の方法を学ぶ経験	2.24（0.81）	***
第3因子：地域とのつながりを学ぶ経験	3.18（0.63）	***
第4因子：地域の煩わしさを知る経験	1.20（0.40）	***

注. ***＜.001

「親の経験」項目とバリマックス回転後の因子負荷量行列

			F1	F2	F3	F4
第Ⅰ因子＜子どもとの関わり方を学ぶ経験＞	Ⅱ-15	提供会員のおかげで、子どもの身体面が安定した（病気や怪我が減った）。	0.700	0.259	0.178	0.133
	Ⅱ-21	提供会員のおかげで、子どもに、挨拶などの礼儀作法が身についた。	0.654	0.297	0.334	-0.006
	Ⅱ-12	提供会員のおかげで、子どもの精神面が安定した。	0.643	0.270	0.378	-0.003
	Ⅱ-2	提供会員のおかげで、子どもに、早寝早起きなどの生活習慣が身についた。	0.632	0.182	0.103	0.058
	Ⅱ-8	提供会員から、食い初め等年中行事や、伝統文化の大切さを教えてもらった。	0.628	0.324	0.117	0.120
	Ⅱ-4	提供会員のおかげで、子どもにコミュニケーション能力が身についた。	0.578	0.200	0.440	0.000
	Ⅱ-11	提供会員のおかげで、子どもの病気への対処に関して不安が減った。	0.551	0.351	0.283	0.092
	Ⅱ-19	提供会員に、親としてだけではなく、社会の一員として認めてもらえた。	0.507	0.394	0.290	-0.010

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

「親の経験」項目とバリマックス回転後の因子負荷量行列

第Ⅱ因子<家事や育児の方法を学ぶ経験>	Ⅱ-26	提供会員から、物事の見方・考え方を教えてもらった。	0.374	0.758	0.246	0.049
	Ⅱ-25	提供会員に、育児の悩みを聞いてもらった。	0.315	0.725	0.294	0.053
	Ⅱ-30	提供会員に、育児の方法を習った。	0.321	0.626	0.187	0.033
	Ⅱ-9	提供会員から、親としての姿を学んだ。	0.480	0.495	0.343	-0.075
	Ⅱ-18	提供会員から、効率的な家事や倹約の方法について習った。	0.411	0.478	0.050	0.195

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

「親の経験」項目とバリマックス回転後の因子負荷量行列

第Ⅲ因子<社会とのつながりを学ぶ経験>	Ⅱ-31	提供会員やファミリー・サポート・センター事業は、いざと言うとき助けてくれる存在になった。	0.120	0.118	0.722	-0.099
	Ⅱ-22	提供会員のおかげで、家族以外の人と関わる機会ができた。	0.324	0.234	0.579	-0.025
	Ⅱ-6	提供会員を、地域のボランティア(有償・無償)として尊敬している。	0.140	0.101	0.549	-0.224
	Ⅱ-23	提供会員に連絡すればよいと思うと、孤立感を感じなくなった。	0.298	0.351	0.491	0.031
	Ⅱ-13	提供会員に、無理なお願いを引き受けてもらった。	0.356	0.210	0.412	0.041

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

「親の経験」項目とバリマックス回転後の因子負荷量行列

第Ⅳ因子<地域の人を信頼する経験>	Ⅱ-14	提供会員に、プライベートなことを聞かれ嫌な思いをした。	0.078	-0.029	-0.050	0.699
	Ⅱ-17	提供会員から、子育ては母親がすべきものと言われた。	0.116	0.106	-0.066	0.645
	Ⅱ-27	提供会員に、子どもを預けることが不安になった。	-0.015	0.033	-0.055	0.515

因子抽出法: 主因子法
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

事業の月間利用頻度

	度数	%		有効%	
月１回未満	135	14.0	43.7	15.9	49.4
週１回未満（月１～４回未満）	285	29.7		33.5	
週１回以上週２回未満（月４～８回未満）	167	17.4	44.7	19.6	50.6
週２回以上週３回未満（月８～20回未満）	180	18.7		21.2	
ほぼ毎日（月20回以上）	83	8.6		9.8	
無回答	111	11.6	11.6	_	_
合計	961	100	100	100.0	100.0

「親の経験」と利用頻度の相関

	月１回未満	月20回以上	P
経験Ⅰ	1.64 (0.62)	2.69(0.66)	***
経験Ⅱ	1.68(0.68)	2.44(0.73)	***
経験Ⅲ	2.61(0.83)	3.41(0.45)	***
経験Ⅳ	1.19(0.43)	1.22(0.39)	

注. **P＜.01 ***P＜.001

「親の発達」次元得点平均（「以前そうだった」を含まない）

	除外後	P
第１因子：柔軟性	3.01(0.59)	***
第２因子：自己抑制	3.11(0.52)	***
第３因子：運命・信仰・伝統の受容	2.75(0.58)	***
第４因子：視野の広がり	3.31(0.48)	***
第５因子：生き甲斐・存在感	3.00(0.49)	***
第６因子：自己の強さ	2.60(0.57)	***

注. ***p<.001